エアー、キャラヴァン

《エアーキャラヴァン》

昭和四十二年七月一日　印刷
昭和四十二年七月十五日　発行

著者兼発行者　東京都大田区御園一の二五　上田彰

印刷所　東京都中央区西八丁堀四ノ八　美鷹印刷株式会社

中吉　丸正商社　千葉県市川市中山町二の二三四

浦吉　埼玉県浦和市仲町　尾張屋百貨店

羊吉　東京都大田区御園一の二五　羊屋呉服店

宮吉　岩手県宮古市末広町二の一　玉木屋百貨店

若吉　北海道稚内市東町北弐　紅屋百貨店

佐野吉　栃木県佐野市朝日町八二九の一　小佐野百貨店

梨吉　山梨県甲府市北の内一の八　中込百貨店

和田吉　丸正商社　東京都江戸川区一之江町三の五一

広吉　日本交通公社　東京都調布市深大寺二五五一

コンダクター

パリー・ホテルコモドーレ前にて著者

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

エァー、キャラヴァン

東京蒲田ひつじや呉服店
上田　彰

目次

はじめに……七
カイロ……二〇
ローマ……四八
ポンペイ・ナポリ……五六
ベニス……六三
チューリッヒ……六七
ルッツェルン……七八
南仏ニース市……八一

モナコ公国……八三
マドリード……八八
パリー……一〇〇
ロンドン……一二八
西ベルリン……一四二
東ベルリン……一四九
ハンブルグ……一六五
むすび……一八一
桜田門外の変……一九七

はじめに

呉服の仕入を終えた羊吉（ようきち）は、問屋の店先を足ばやに出ようとした。

近づいた佐野吉が、羊吉へ声をかけた。生れのせいでもあるが、百貨店の社長が身についた上品な風采で、彼は身をそらし、馴れた手つきで、やがて、羊吉の肩へ手をかけ、あとに残る客や店員達を、すばやく、眺めまわしたが、その容姿は如何にも世渡りに自信を持った人の、投あみのように一気にひろがってゆく、まなざしであった。

羊吉は彼の方へヨソ行きの顔を向けた。少し、ひるんだ表情に服装（なり）は少々崩れている。

「一週間ばかりハワイへあそばないか」

突然の事に羊吉は驚いた。が、しかし、負けずぎらいの、いつもの調子に、

「一週間か、よかろう。経費は？」

「五拾万円」

羊吉は度きもをぬかれたが、売言葉に買言葉だ、腹をきめて、うわまえをはねる。

「五拾万円！。どうせ遊ぶなら、もう、ちょっと出して、欧州旅行をしたらどうだ？」

「もう、ちょっととは幾ばくだ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「百万円」

「幾日間だ？」

「そうさね。四週間はかかるだろう」

すると。経費は百五拾万円？」

「然り」

「五拾万円出すも、百五拾万円出すも、出すに変りはないよ。五十歩百歩だ」

羊吉は佐野吉の、くち車に、うまくのせられ、ただ、こうした、かりそめの語らいが、片雲の風に誘われ、道祖(どうそ)の神の招きに会い、そぞろ神のものに憑きて旅心定まり、気の変らぬうち、善は急げと、手まわし素早く、股引のやぶれを綴り、笠の緒(を)つけかえて、三里に灸(やいと)をすえ牛旁（ごぼう）のような尻尾（しっぽ）をふって居るに思

いを寄せ、

ひとくせある、つわものども八人、馳せ参じたは、外国語のガの字も知らない烏合の衆、必然の盲唖旅行が思いやられ、由なく、交通公社の、この道のベテラン、五ケ国語のあやつれる、広吉コンダクターに同行を願う事として、一行十一人は、親船に乗った気丈さに出発した。

羊吉は世界の表裏を見る、確かな、視る眼を持ちたいと切に願った。

今年一九六六とせ、弥生も末つ方、春たつ霞の空に、真綿雲が、ぽっかり浮び、遠く房総半島が、かすかにして、瓦屋根のカゲローがゆらめき、風なき絶好の飛行日和は、羊吉の肌にもやがての水々しい新緑を幻想させるような自然の奏でる序曲だった。

頼母しき限りは、近親、朋友、宵より集いて、今日、一行を羽田まで送る。

羊吉は前途三千里の念、胸に塞りて、身はここに、心はもはや欧州の空にとび、見送りの人々と、しばしの別離を告げて、南廻りロンドン行の機中へ姿を消した。

〜春や春
その春に、
汝
世界の空を
羽撃るかな。
とび去れよかし
とび去れよかし。

地上でのゼット機の爆音は非常に高いのであるが、機は音速の二倍に、爆音を後方へ跳ね、前方の空気を上下左右に裂きて、静寂の中へ中へと突き進むため、機内では極めて静かであり、機の後方には、一わたりの尾をひいている。機内の、

換気は随意だが、空気は停滞（ていたい）し、囁（ささや）く言葉も、よく聞える。

内外人相半（なかば）する、満員乗客の、頭だけが、きわ立って眼に止まり、その頭から紫煙は昇って、機の天井に突き当っては霧散している。

コップ一杯に酒盛った酒も、こぼれぬほど、機体に動揺（どうよう）はないが、しかしながら、婦人客の衣服がほのかに揺れているさまを見ていると、飛行は至極のどかで、ロマンチックである。

機内の空気をふるわせて、

「間もなく香港へ着きます。みなさんベルトをおかけ願います」

と、ホステスの放送である。羽田を経ってから三時間をついやし、雲海ばかりだったが、少しも、たいくつせず、またたく間のような気がして、どうやら、外国へ来たという感じである。

やや経って、

「香港空港は悪気流と濃霧のため、着陸不能でありますから、台北飛行場まで引返しますが、所要時間は四十分の予定であります。

こんどはパーサーの放送に、

「そらッ」

と、羊吉が狼狽（うろたえ）、蒼（あお）くなって呟（つぶや）くと、甲州の梨吉が言った。

「小莫迦、みぐるしい、気をつけよ」

日本では最近、史上稀にみる大航空機事故が、たて続けに三度も起り、全世界の航空機業界に、一大センセーションを巻起した直後であり、羊吉ばかりでなく、機内の、ざわめきも無理がなかったのである。

台北飛行場の屋内テレビには、哀愁（あいしゅう）を帯びた中華民謡と、京劇が流れている。京劇は日本の劇とは違い、西洋の劇の方へ片寄り、共通の仕草があるように思った。

二つの中国で問題になっていても、文化はすべて一つであるらしい、その劇が立証していた。

ここで羊吉は旅のつれづれに支那本土の話をした。

『昔、彼の国の貴族の大人（たいじん）は、日本国ほどの領土をもち、数千人の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com